

表現手法を取り入れた文学的文章の授業づくり

能登 まゆ子・増澤 康男

校種・学年： 中学校 1年生

教科： 国語

単元名： 「さんちき」「少年の日の思い出」 東京書籍出版平成 17 年度教科書準拠



あらまし

最近、子どもの読書が減っているとよく耳にします。文章を読み、頭の中で情景を思い浮かべながら読むことの面白さを知らない子どもが増えているのではないのでしょうか。そこで、国語の面白さを生徒に味わわせる手立てとして教材のもつ多様な表現手法を整理し、その視点を取り入れた授業を行うことを試みました。

手立てと活動

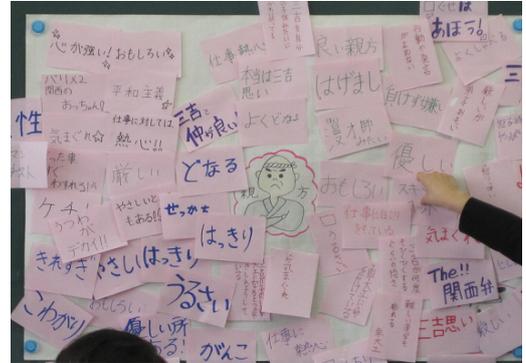
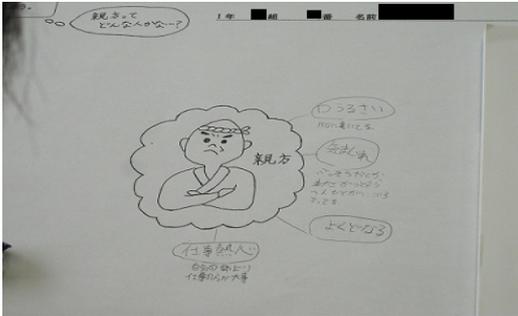
表現手法については廣野由美子著『批評理論入門』の「小説技法篇」を手がかりに、教科書に掲載されている文学的文章の教材分析を行い、その表現手法をまとめました。『新しい国語 1』（東京書籍）に掲載されている文学的文章について教材分析を行ったところ、短編である教科書の教材を分析する手がかりとして充分応用できるということがわかりました。「小説技法篇」をもとに、『新しい国語 1』（東京書籍）の文学的文章「さんちき」と「少年の日の思い出」の表現手法を分析した結果は表 1 の通りです。

表 1. 「さんちき」「少年の日の思い出」表現手法の分析

表現手法の項目	さんちき	少年の日の思い出
冒頭	映画のような手法。読者がその場において、一緒に体験しているような工夫をしている。	客の少年時代の思い出話を生み出すための効果がしかけられている。「わたしの末の男の子」の登場によって、客の過去の出来事が語られることになり、部屋やあたりの暗さが少年時代の暗い過去を暗示している。
ストーリーとプロット	全般的には時間の流れとともに話が進んでいくが、部分的に過去や未来のことを取り入れたりしている。	わたしが客と話している現在から物語は始まり、客が過去のこと(少年の日の思い出)を思い出しながら語っている。
語り手	語り手は物語の外にいたので三人称の語りである。	語り手は冒頭部分では「わたし」であり、そのあとは「客」である。
焦点化	焦点はあるときはさんちき、あるときは世間的になり変化している。	焦点人物は物語世界の内側にいるので、内的焦点化である。
提示と叙述	登場人物の会話がそのまま記録・報告されており、語りの内容がそのまま出来事を示しているため、提示の形態がとられている。	提示
時間	一つの時間体系の中に、一部過去の時間が流れ、フラッシュバックの方法がとられている部分がある。物語のはじまりは、ある程度進んだ状態であることから、イン・メディアス・レースである。	語っている現時点と語られている過去という二つの時間体系が存在する。作品のはじめでは語っている現時点での時間が流れ、そのなかに挿入されている物語の部分では、過去の時間が流れ、フラッシュバックの方法がとられている。
性格描写	さんちきの性格は、語り手による説明や会話の内容から描かれている。一方で親方の性格は、会話の文章などを読み深めていくことによって、新たな一面を発見できるような工夫がしてある。	対役のエーミールは相当な悪者として描かれている。しかしそれは、少年時代の思い出を語る「わたし」の視点から物事をみているからである。客観的に見れば、エーミールは悪者なのか正しいのか読者によって感想は異なるはずである。
アイロニー		わたしから見たエーミールの性格に、「非の打ちどころのない悪徳を持っていた」や、「あらゆる点で模範少年だった」などの「言葉のアイロニー」が使われている。
声	モノローグ的である。	冒頭部分では「わたし」が語り手であり、その後は「客」が語り手であり、複数の語り手が存在する。
イメージリー	場面が変わる部分で、ろうそくの明かりの描写があり、ろうそくがいたり、消えたりすることで、明るくなったり、暗くなったりと舞台装置の役割を果たしている。最後の場面にはろうそくがまとまって登場し、登場人物の気持ちを表わしているということも考えられる。	闇の描写が少年時代の悲劇的な結末を暗示している。チョウの裏の意味として、少年の日の思い出を表わしている。それを一つ一つ押しつぶすことによって、苦い思い出から決別しようとしている。
反復	親方の「あほう」という言葉が反復され、統一感を生みだしている。	
異化		
間テキスト性		
メタフィクション	メタフィクションではない。	
結末	親方の優しさに触れ、車に名前を残し、「腕のいい車大工になる」という決意をしたハッピー・エンドで締めくくられるため、閉じられた終わりである。しかし、その後の物語の続きを考えたりすることも可能である。	この作品はチョウを台無しにしてしまった罪悪感と、エーミールの態度へのやりきれなさから、自分のコレクションしていたチョウを一つ一つ指で粉々に押しつぶしてしまうという悲劇的結末で終わっている。通常なら、現在に場面が戻って話が終わるが、この話では現在には戻らず、過去の場面で話が終わっている。チョウを一つずつ取り出し、押しつぶしてしまうという結末について、この行為の意味づけは読者にゆだねられ、多様な解釈が可能であるため、「開かれた終わり」である。

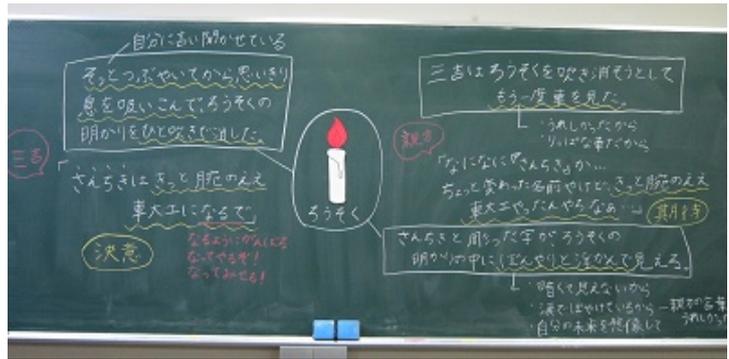
これらの表現手法の中から「さんちき」では「性格描写」と「イメージラリー」を、「少年の日の思い出」では「イメージラリー」と「結末」を実際の授業に取り入れた指導案を作成しました。

「さんちき」の「性格描写」で分析した視点を取り入れた授業では、親方に着目します。「親方の人物像を考える」という課題で、生徒はまず個人で本文を読み進め、会話や行動から親方の性格・仕事に対する姿勢などを読み取ります。その後グループで交流し、そこで出た意見を黒板に用意した模造紙に貼り、クラス全体で親方の人物像をまとめる活動を行います。



「イメージラリー」で分析した視点を取り入れた授業では「さんちき」でのろうそくの効果に着目します。生徒にはまず、最初の一文と最後の一文に注目させ、文章中でろうそくがいつたり消えたりしていることを意識させます。そして、そのような部分で場面が展開し、ろうそくが舞台装置の役割を果たしているということを考えさせる活動を行います。また、最終場面にまとめて登場するろうそくの描写から三吉の気持ちを考えさせる活動を行います。

「少年の日の思い出」の「イメージラリー」と「結末」で分析した視点を取り入れた授業では、物語の構成に着目します。「少年の日の思い出」は額縁構造といわれる構成です。通常、額縁構造では現在の場面、過去の場面、そして再び現在の場面に戻ります。しかし「少年の日の思い出」は、現在の



生徒には「客が回想を語り終わり、場面が再び現在の場面に戻ったとき、客と私の間でどのような会話が交わされるか。」を考えさせ、物語の続きを創作させる活動を行います。

▶ 期待される効果

このような視点を授業に取り入れることで、生徒が初発の感想では持つことのできなかつた意見を持つことができるようになりました。また各時間に設定した評価規準を満たし、単元目標を概ね達成できたと考えられる生徒が多かった。これらの指導をくり返し、教材や授業時間ごとにさらなる工夫を積み重ねることで、読む能力の向上につながる可能性があると考えられる。

▶ 補 足

表現手法を取り入れた授業は生徒が同様の授業を受けたことがない場合、表現手法を意識させるための時間が必要です。また、生徒自ら気づくことが難しく、ある程度教師主導ですすめる必要があります、どこまで生徒自身に考えさせると良いかが課題です。